

シュトゥールへの美術鑑賞の遠足があり、帰途フライブルクの郊外で、夕食会と賑やかな歓談が遅くまで続いた。

学会を振り返って印象に残ったことは、会議での活発な討議と、全体を通じての和やかな雰囲気である。これは、主として、主催者側の3年にわたる周到な準備——あらかじめ参加者全員に発表論文のコピーが送られたことも含めて——と、人数の制限などに由るものと思われる。だが、期待された研究者数名が病気などのため欠席したこと、「原典」が主としてアウグスティヌスに限られ、たとえばプソイド・ディオニシウス・アレオパギタなどには言及されなかったことなどは残念であった。それにもかかわらず、この学会は、主催者の言葉を借りれば、エリウゲナ研究にとって「歴史的意味」のあるものであったといえるであろう。

なお、この会議での全発表論文は、ハイデルベルク科学アカデミーより、一冊の本として出版される予定である。

(小田川方子)

第8回国際教父学会

昨年夏、英国の Oxford で開催された「第八回国際教父学会」(The Eighth International Conference on Patristic Studies)』に出席する機会をえたので、簡単に報告したい。

本学会は日本であまり知られていないが、充実した内容を備えた注目すべき行事である。『教父学概説』の著者、特に『オックスフォード・キリスト教会辞典』の編者として有名な F. L. Cross が中必となり提唱し、1951年9月に発足し、以後4年毎に開いている。クロス之死(1969)後も英国の学者が主催者となり、先の辞典の改訂者 E. A. Livingstone 女史が事務局を担当し、毎回着実な成果を挙げている。筆者が初めて参加した第六回大会の時は、J. Daniélou 枢機卿が開会講演を受持ったが、彼も故人となった。このほか学会で知りあっていたイタリアの M. F. Sciacca も死去し、この意味では世代の交代がみられる。しかしこれは学会の停滞

をもたらしものではなく、むしろ若い学者の積極的な活動をうながしている。第二次世界大戦のため、独伊の教父学研究は遅れをとっていたが、現在では英仏に並びこの両国からの参加者も多く、それにスペイン、オランダ、ベルギー、北欧諸国に加え、米加からも多数参集するようになった。今回は750人以上が出席し盛会であった。それに全世界的な規模で教父学研究者間の国際連絡機関(Association Internationale d'Études Patristiques)が再発足した。なお今までの各大会における研究成果はすべて *Texte und Untersuchungen* 中の *Studia Patristica* にまとめられて公刊されている。

さて、会の内容について具体的に述べよう。毎回会期としては9月の1週間が選ばれ、6日間の日程を組む。日毎のプログラムは過去数回ほぼ一定した枠組みをもっている。まず、早朝各教派の礼拝。午前9時10分から12時50分までが研究発表。この間に休憩と40分間の *Instrumenta Studiorum* の時間がある。午後4時30分から6時まで主題別の会合、その後には講義が続き、夕食後夜は8時30分から講演会。以上が毎日の会の流れである。

研究発表は11のセッションに分れ、それぞれ毎日8名ほどの発表者が当る。人数が多いため各自20分間で短い。言葉は英独仏伊のどれかで通訳はない。*Instrumenta Studiorum* の時間には毎日8～9名の代表者がそれぞれの関係する研究所、雑誌、出版などの活動につき現状報告をする。たとえば9月5日には、M. Geerard, *Corpus Christianorum, Series Graeca* : F. Glorie, *Corpus Christianorum, Series Latina et Continuatio Mediaevalis* : F. Graffin, *Patrologia Orientalis* : P. Grech, *The Patristic Institute, Rome* : T. Hall, *Theologische Realenzyklopädie* : T. Halton, *Fathers of the Church* などがあつた。いずれも国際学会ならではの最新の情報で、みなに喜ばれると同時に、大いに刺激的でもあつた。午後の主要テーマとしては今回は 1. Gnosticism. 2. Second Century. 3. Origen. 4. Eusebius. 5. Cappadocian Fathers. 6. Augustine. 7. Christianity and Philosophy. 8. Christology. 9. Textual Criticism. 10. Patristic Exegesis. 11. Church and State. 12. Ascetica. 13. Liturgy の13であつた。このうち、たとえば第6部門では、ローマのアンセルモ研究所の B. Studer が *Le Christ, notre justice selon st. Augustin*. ローマのアウグスティヌス研究所の V. Grossi が *L'antropologia*

di Agostino : De gratia et libero arbitrio e De correptione et gratia, スペインのサラマンカ大学の J. O. Reta が Une polémique augustinienne contra Cicéron : Du fatalisme à la prescience divine, ハイデルベルク大の A. Schindler が L'histoire du Donatisme du point de vue de sa propre theologie について, それぞれ 1 時間以上にわたり話し, 続いて活発な議論がなされた。第 7 部門ではオックスフォード大の A. H. Armstrong, アメリカの M. T. Clark, カナダの J. M. Rist などによる発表が行なわれた。夕方の講義は各国の代表的学者が担当した。印象に残ったのではソルボンヌ大の A. Mandouze, Patristique et Liberté. Reflexions sur les Présupposés et les Implications idéologique et scientifique d'un Domaine mixte. メルボルン大の E. F. Osborn, Elucidation of Problem as a Method of Patristic Interpretation などであった。夜は 1 人の講演者が全員に話した。そのなかで, ライデン大の E. P. Meijering の Augustine on Creation, Time and Eternity. An example of Platonic Christianity が反響をよんだ。

毎日このようなスケジュールで学会がすすめられていったが, 特別な催物もあった。たとえば劇場で「アウグスティヌスは何を告白したか」という dramatic reading があった。これはアメリカの神学者と演劇関係の専門家が協同して, 『告白録』を戯曲化し, その内容のもつ現代的意義の解明を試みたものであった。また会期中に特別な研究会や各種の集会なども企画されていた。筆者は Augustinus-Lexikon の出版準備会に加わったが, 項目の選択や出版計画などについて知らされ興味深かった。

本大会に出席し感じたことを最後に記してみたい。まず, 世界の教父研究の分野でもコンピューターの利用が進んでいることを知らされた。それは用語の研究やインデクス作成のためだけでなく, たとえば, Banque d'Information Bibliographique en Patristique (ラヴァル大学) のように, 各国の文献類を集収したものもあった。次に, 現代の問題意識の教父研究への反映である。たとえば, 女性問題の視点や民衆との関係から教父思想を再検討しようとする態度である。さらに, 教父の思想を当時の歴史状況の中で捉えようとする人々, あるいは, その現代的意味を問う人々, 言語研究においても歴史的な面から接近する人々と哲学的な関心から取り扱う人など, その研究態度において様々であった。

今後わが国で教父学研究（中世哲学研究の前提！）をすすめていくためには、文献の集収，研究者の交流に加えて，外国語による業績の発表を盛んにし，国際レベルでの学的交流が大切なように思う。

（宮谷 宣史）